様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３０００３１

研究課題名（和文）アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築

研究課題名（英文）The Establishment of General Historical Study about Late Khmer Civilization

研究代表者
杉山　洋（SUGIYAMA, HIROSHI）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・特任研究員

研究者番号：５０１５００６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究ではこれまでアンコール文化遺産の大形石造建造物のみが注目されることが多かったクメール王朝において、極盛期後の様相を明らかにすることを目的とした。この目的のために1.アンコール遺跡群内末期遺跡の研究、2.アンコール遺跡群終末後の王都の研究、3.王朝末期の生産活動の研究、の3点を研究の柱とした。1ではアンコール・トム内の西トップ遺跡を対象遺跡として、本遺跡が王朝末期の14世紀代から整備される事が明らかとなった。2ではロンヴェーク遺跡の王宮や中心寺院の内容を発掘調査で明らかにすることができた。3では14世期の黒褐釉陶器窯跡の実態を発掘調査によって明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：　In this research, the objective is to clarify the aspects after the extreme heyday in the Khmer dynasty where only the large masonry structure of Angkor heritage have been to be frequently attracted.For this purpose 1. Research of the remains of the Angkor monuments group dated to 13th,14th century. 2) Research of the palace and citadel site after Angkor dynasty, and 3) Research on production activities at the end of the dynasty as the main of research.
In No.1 theme, we target the Western Prasat Top ruins in Angkor Tom. It was revealed that Western Prasat Top was maintained from the late dynasty in the 14th century. In No.2 theme, we were able to clarify the contents of the royal palace and central temple of Lonveak site by excavation survey. In No.3 theme, it was able to clarify the production system of the black-brown glazed pottery kiln site of the 14 th century by excavation survey.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　アンコール遺跡群　クメール陶器　貿易陶磁　上座部仏教　仏教美術史

１．研究開始当初の背景

これまでアンコール遺跡群研究は 12 世期後半から 13 世期前半のアンコール・ワット期からアンコール・トム期にかけての、クメール王朝の極盛期に多くの研究が集中してきた。さらに当該期はアンコール王朝の衰退期としてとらえられてきており、顕著な造営活動や社会活動が認められない時期として、等閑視されてきた。

２．研究の目的

本研究は上記のようにこれまであまり研究が行われてこなかった 13 世紀以降のアンコール王朝の実態解明をめざすとともに、その後の東南アジア大陸部の中世に至る変化の道筋を明らかにしようとする研究である。

３．研究の方法

表記の目的を達成するため、考古学を主体に、文化人類学、美術史学の各研究者を分担者として、当該期の文化のあり方を多面的にとらえようとした。具体的には、1.アンコール遺跡群内末期遺跡の研究、2.アンコール遺跡群終末後の王都の研究、3.王朝末期の生産活動の研究、の 3 点を研究の柱とした。

４．研究成果

（１）アンコール遺跡群内末期遺跡の研究

今回の研究ではアンコール・トム内西トップ遺跡を調査対象とした。本遺跡はバイヨンの西 500m に位置し、東を向く石造 3 小塔と、付属する仏教テラスで構成される。

調査の結果、本遺跡が 14 世期に中心部分が造営されたことが明らかとなり、アンコール・トム内でも 13 世紀以降、石造建造物の造営が続いていた事が明らかとなった。

さらに今回の調査で、北祠堂の東を除く 3 面の扉石の浮き彫りの全容が明らかとなり、特に北側扉石の浮き彫りが、遊行仏と呼ばれる様式であることが明らかとなった(第 1 図)。これはタイチャオプラヤ川流域の 14 世期頃の仏像との関係が指摘され、14 世紀に於けるアンコール遺跡群での上座部仏教の展開に関して新たな証左を与える発見となった。

第 1 図　西トップ遺跡北祠堂北扉レリーフ

さらに地下調査においては北祠堂基壇下にレンガ遺構が検出された(第 2 図)。レンガ遺構は 2m 四方で深さ約 1.5m の規模を有し、中で火を焚いた痕跡が明瞭に観察された。遺構内からは大量の炭化物ともに金製品、青銅製品、ガラス製品などの遺物とともに人骨も発見された。これら出土遺物の分析から、このレンガ遺構内で火葬を行い、拾骨の後、全体を埋め戻し北祠堂を建立したことが明らかとなった。炭化物の放射性同位炭素年代決定法による年代測定の結果、68.2%の確率で 1397 年～1412 年に年代が収まるとの結果を得ることができ、アンコール遺跡群における仏教儀礼の実際や、ポストバイヨン期の当該遺跡群のあり方など、様々な問題を提起する調査結果となった。

第 2 図　西トップ遺跡レンガ遺構

（２）アンコール遺跡群終末後の王都の研究

アンコール王朝がタイのアユタヤの攻撃を受けた後は、王都が南のプノンペン周辺へ移動する。これら移動後の王都の中で最も保存状態がよいのが 15 世期後半のロンヴェークである。今回はアンコール王朝末期から中世への移行のあり方を探るために、このロンヴェークでも発掘調査を行った。

その結果、当時の盛んな対外貿易の様子をとどめる大量の貿易陶磁が発見されるとともに、これまで不明とされてきた王宮の所在地を確かめることができた。また中心寺院であるワット・トロラエン・カエンにおいては境内の測量を行い、建物配置を確認するとともに、時代変遷についての手がかりを得ることができた。

第 3 図　ロンヴェーク南土塁断割

（３）王朝末期の生産活動の研究

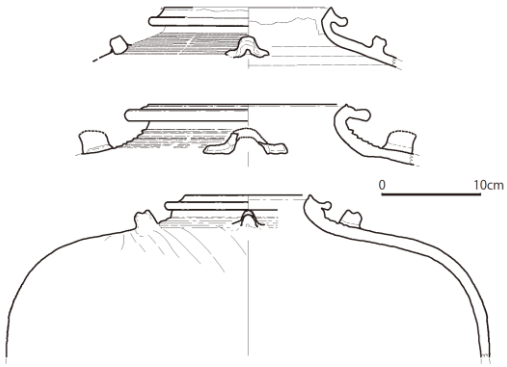
これまで王朝の衰退とともに生産活動もアンコールの地では衰退したと漠然と考えられてきた。しかし１で掲げた西トップ遺跡の調査では、14 世紀以降に、黒褐釉瓦を用いた木造礼拝堂が建立されており、瓦などの生産活動が活発に行われていたことが明らかとなった。また時期を同じくしてカンボジア研究者による、14 世紀代の窯跡の調査が行われ、我々も当該期の生産活動の様相を明らかにすべく、黒褐釉窯跡の調査を行った。

今時の科研費ではヴィエル・スヴァイ窯跡とヴィエル・コック・トゥリア窯跡の２箇所で黒褐釉陶器窯跡の調査を行った。調査の結果、幅約 2m、長さ約 15m の地上式登窯が検出された(第４図)。これまでに調査した灰釉などのクメール陶器窯跡と同様な構造の窯跡で、黒褐釉陶器に関しても基本的な生産技術は、初現となる灰釉陶器などと同じであることが明らかとなった。

第４図　ヴィエルスヴァイ窯跡

また今回の調査で生産機種の詳細も明らかになった(第５図)。ここでは黒褐釉四耳壺、を中心とする生産が行われ、動物形象品や円盤状遺物なども発見され、黒褐釉窯跡での生産の詳細が明らかになった。

さらに放射性同位炭素年代決定法によって、13 世紀後半から 14 世紀代の年代が明らかとなり、この種の黒褐釉陶器の生産が 14 世紀頃まで継続することが明らかになった。



第５図　ヴィエルスヴァイ窯跡出土四耳壺

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①杉山洋、佐藤由似、「西トップ遺跡の保存と修復」、奈良文化財研究所紀要、査読なし、2017、pp. 6-7

②杉山洋、佐藤由似、「西トップ遺跡の保存と修復」、奈良文化財研究所紀要、査読なし、2016、pp. 3-4

③杉山洋「カンボジアの青銅鏡」、『東南アジア考古学』、35 号、査読有り、2015、pp. 31-41

④杉山洋、佐藤由似、「西トップ遺跡の保存と修復」、奈良文化財研究所紀要、査読なし、2015、pp. 5-6

⑤杉山洋、佐藤由似、「西トップ遺跡の保存と修復」、奈良文化財研究所紀要、査読なし、2014、pp. 3-4

〔学会発表〕（計８件）

①杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会、2017 年 12 月 4 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

②杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会技術小委員会、22017 年 6 月 24 日、「西トップ遺跡の保存と修復

③杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会、2016 年 12 月 10 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

④杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会技術小委員会、2016 年 6 月 5 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

⑤杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会、2015 年 12 月 13 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

⑥杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会技術小委員会、2015 年 6 月 7 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

⑦杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会、2014 年 12 月 10 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

⑧杉山洋、佐藤由似、国際調整委員会技術小委員会、2014 年 6 月 8 日、「西トップ遺跡の保存と修復」

〔図書〕（計３件）

①杉山洋、佐藤由似、奈良文化財研究所、『ヴィール・スヴァイ窯跡群 1 号窯発掘調査報告書』、2017、29

②杉山洋、佐藤由似、奈良文化財研究所、『ポスト・アンコール期遺跡の調査』、2016、33

③杉山洋、佐藤由似、奈良文化財研究所、『ポスト・アンコール期遺跡に関する研究報告書、2015、55

〔産業財産権〕

○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://www.nabunken.go.jp/research/cambodia/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
杉山　洋（SUGIYAMA Hiroshi）
独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所　企画調整部
国際遺跡研究室　特任研究員
研究者番号：50150066

(2)研究分担者
石村　智（ISHIMURA Tomo）
独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所　無形文化遺産部
室長
研究者番号：60435906

(3)研究分担者
淺湫　毅（ASANUMA Takeshi）
独立行政法人国立文化財機構
京都国立博物館　学芸部　室長
研究者番号：10249914

(4)連携研究者
佐藤　由似（SATO Yuni）
独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所　企画調整部
国際遺跡研究室　専門職
研究者番号：70789734